昭和四二年九月一二日　第一刷発行
著　者　石坂洋次郎
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町二一一二一二
電　話　東京（942）一一一一（大代表）
振　替　東京三九三〇
印刷所　星野精版印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
定　価　三八〇円
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© 石坂洋次郎　昭和四一年

Printed in Japan

くろ

石坂洋次郎

川は流れる……一九三
はかりごと……二二一
親ごころ……二五八
謙吉帰る……二六五
産科について……二一〇
墓地で……二二九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

装幀

荻　太郎

長編小説

颱風とざくろ

わが心に傷ありて

坂本一雄が年末の休暇に、冬山でなだれにやられて、五人の全員が行方不明を伝えられてから、桑田英子は、急に口が重く、動作が鈍い女になってしまった。

冬の山も夏の山も全然知らない英子は、なだれに捲きこまれた一雄の最後の有様をあれこれと想像しても、納得のいく一雄の姿をとらえることが出来なかった。そして、悲しみを越えて、しまいにはただ腹立たしい気持が募るばかりだった。一雄のバカ！　バカ！　バカ！　人にさよならも云わないで……。

春になって、一雄等の凍死体が発掘されたとき、英子は、病院長をしている一雄の父、母、弟、妹、山の仲間達と一緒に、信州の上高地に出かけた。雪に埋められていた一雄の顔は、白い蠟細工のようで、やつれたあともなく、骨折だらけだという身体も、シートに横たえているかぎり、そう見苦しいこともなかった。それだけにまた、一雄の存在がかき消されて、ヌケガラだけが残っているという実感が強かった。

夜、梓川の川原で、薪を積み油を注いで、五人の遺体を焼いた。赤い焔や油のススが混じった黒い煙が、雪どけの川の流れにうつって印象的だった。空には少しばかりの星がまたたいていた。

火葬をとりまく六十人ばかりの人々のうち、山の仲間の青年達が、元気な声で「雪山讃歌」を合唱して、死者の魂に別れを告げた。

雪よ　岩よ
我等が宿り……

その声に、雪どけ水の流れの音が伴奏をしているよう

で、女達は声をあげて哭いた。英子も哭いた。身体が涙になってすっかり溶けてしまうのではないかと思われるほど……。

年月がすぎて、一雄の顔の輪郭が記憶からうすれていっても、夜の川原で死体を焼いた時の印象——まばらな星の群れ、闇を背景にした赤い焔と黒い煙、水にうつるその影、流れの強い音、「雪山讃歌」の合唱、女達の号泣、そうした情景だけは、いつも切実に英子の脳裏に蘇えって来た。あの風景は、生も死もない、汎神論的な眺めだったのだと、英子は自分に云いきかせたりした……。

遺骨の箱を抱いて帰る汽車の中で、隣り合せに坐った一雄の母親の房子が、小さな一枚の紙きれをハンドバッグからとり出して、英子に手わたした。

「これ、一雄のアノラックのポケットにあった山日記の一頁なんです。どう処分しようかと考えましたが、結局、貴女にあげることにしましたわ。読み終ったら焼きすてた方がいいんじゃないかしらと思いますけど、貴女にお委せしますわ……」

英子は、その紙片に鉛筆で記された一雄の日記を読んだ。

十二月二十九日　快晴

装備は整った。仲間も経験者ばかり。だが、どうもぼくには、これっきり英坊に会えなくなるんだという不吉な予感がしてならない。ということは、ムードだけでは自分を節しきれなくなって、彼女の肉体が欲しくなったというせいなのかな。それにしても死ぬなんてバカな……。まあ、いいさ。たとえぼくが死んだとしても、彼女が生きてるかぎり、彼女の心の片隅に、ぼくはひそかに息づいていて、彼女の人生を励ましてやれるのだから……。ああ、至る所に死をひそませた、それ故にきびしく白い冬の山々がぼくを招いている。磁石が鉄をひくように……。ぼくは行かなければならない。英坊よ、いや、桑田英子よ、さようなら——

英子はそれを読んでも涙を流さなかった。梓川の川原の夜の火葬に立ち会って、あるだけの涙は全部出しつくしてしまったのであろう。だが、涙は出なかったが、全身を硬直させて、声のない慟哭をした。そして、この日記の一葉で、英子は生涯誰にも話せない、愚かしい行為を演じてしまった。というのは、東京の自宅に帰ってから、紙片をカミソリで細かく刻んで、食事どき、いろんな食物に少しずつ混ぜて胃袋に呑み下してしまったのである。四日間ばかりで、千三ツぎりの紙片は、全部、英子の体内におさまっ

てしまった。

英子の物に憑かれたような愚かしい考え方では、紙は山羊でもないかぎり、消化せずに排泄されるかも知れない。しかし、紙の中にも、ごく微量に消化する栄養素があって、それが自分の血や肉に溶けこむことがないとは云いきれない。——そういう愚かしい暗示を与えたのは、坂本一雄の山日記の一節に、

（……たとえぼくが死んだとしても、彼女が生きてるかぎり、彼女の心の片隅に、ぼくはひそかに息づいていて、彼女の人生を励ましてやれるのだから……）

という言葉があったからだ。云うなれば、坂本一雄が英子にそんな愚かしい真似をさせたのだ。しかし、その行為を思い出すたびに、英子は何とも云えない自己嫌悪の念を覚えるのだった。なんて、ねちっこく、いやらしい女だろう、私は……。何かの本に、どんな人でも、他人に話せない、愚かしい秘密の二つや三つは、胸の奥に押しこんだまま、一生を過すものだとあったが、私の場合、一雄の日記の一頁をコマ切れにして食べてしまったことが、そういう秘密の一つになるのであろう……。

桑田英子と坂本一雄が知り合いになったのは、川崎市の緑の樹木におおわれた丘の上にある、A大学の庭球部に所属していたからであった。一雄は英子の二年先輩だ。

敷地が山林地帯だったので、構内には起伏が多く、陸上競技場やプールなどは低地につくられてあったし、テニスコートも、長い銀杏並木の歩道のつき当りにある大きな体育館の裏手の深い谷間にあった。細くうねった急な小みちを上り下りするのは少し厄介だが、その代り、周囲が緑の丘に囲まれて、静かで、アトホームな雰囲気があってよかった。

坂本一雄と桑田英子は、ある日ぐうぜん、コンビで仲間達と試合をしたが、ウマがあったというのか、二人とも身体がよく動き、殊に前衛の英坊こと英子は、目ざましいファインプレーを演じて、一雄を喜ばせた。

一雄は万能選手で、雨が降ると、屋内でバレーやバスケットをやり、暑い日には、テニスの練習をサボってプールで泳いだりして、マネージャーによく怒られたりしていた。

背丈けは一メートル八十センチぐらい。外国流に形容すれば、カモシカのようにひきしまった身体つきだが、そのわりにいろんなプレーをしている時のほかは、動作があんがいゆっくりしている。髪はG・I刈り。顔立ちは整っているが、陽やけしてあまりくろいので、それを洗い落さな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ければ、ハンサムなのかどうか、顔の正体が分らないほどだった。

しかし、女子学生達に人気がある所をみると、彼女達は異性のカンで、坂本一雄のくろい陽やけの下に、彼女等の食欲をそそる、カッコいいマスクがかくされていることを見抜いていたのであろう。男の仲間のなかには（あんなくろい顔の奴が女子学生にもてたりして……）と、内心やっかんだりする者もないではなかったが、同性が同性をみるカンは鈍いのだから、どうしようもない。ただ、一雄のくろい顔の中で、澄んでおだやかな光を湛えている目だけは、誰が見ても、いい印象のものだった。

桑田英子が一雄と特別に親しくなったチャンスは、まったくおかしなことだった。ある日、練習がすんで、何かでぐずぐずして一人残された英子が、控室で、ショートパンツをスカートにはきかえていると、ふと後に生き物の気配を感じた。ふりむくと、坂本一雄がポカンとした顔で英子のする事を見つめていた。

「いやよ！　坂本君、チカン（痴漢）じゃないの。いやよ！」

英子は左手で、まだホックがかからないスカートを押えて、入口に馳けより、片手にもったラケットで、一雄の頭をポカリと殴った。ネットでぶっつもりが、手元が狂って、ネットのワクの木で、一雄の額をゴツンとやってしまったのである。

「痛いなあ。頭蓋骨が折れたらしいや……。ぼくあね、若い女が着更えている所を見たことがないので、つい見とれていたんだよ。珍しいものだから……」

英子は、一雄の弁明が、大きな男女間の道理にかなっているように感じられて、つづいて連発しようと思っていた悪口が、喉の所でピタリととまってしまった。そして、その代りにとんでもないことを口走ってしまった。

「そんなら中に入って、私の着更えを手伝いなさいよ」

「手伝うよ」

一雄は悪びれもせず、女子の控室に入った。そして、英子に云われた通り、スカートのホックをかけてやったり、後にまわってカーデガンをはおらせたり、「ＪＡＬ」という航空会社のマークが入った袋に、靴やショートパンツをつめこむのを手伝ったりした。

「あら！　一雄さん！　ごめんなさい。私がぶった一雄さんのおでこのところが、紫色にはれ上っているわよ。……みてごらんなさい」

英子は、袋から懐中鏡を出して、一雄に手わたした。の

ぞいてみると、たしかにおでこの右のあたりが黒ずんで腫れている。
「道理でいつまでも痛いと思ったよ。ぼくが痴漢だったんだから仕方がないさ。……でも、おかげでぼくは新しい認識を得たよ。それは、英坊のような暴力派は決してお嫁にもらわん方がいいということだ……」
冗談だと分っていても、一雄に（決してお嫁にもらわんよ！）と云われた瞬間、英子は、ガスがぬけたゴム風船のように、心臓が縮かんでいくような気がした。そして、一雄の肩にとびついて、おでこの紫色の部分にキスをしてやろうかしらんと思ったほどだ。どういう風にするのがキスなのか自信もなかったが……。
一雄の額のコブは、二日ばかり、黒ずんだ色が消えなかった。それを見るたびに、英子は、胸が切なくなった。そのくせ、四五日経って、一雄のおでこの斑点が消え去ると、英子は急に寂しい気がして、一年も二年も消えない傷をつけてやるんだったと、途方もないことを考えたりした。——これが坂本一雄と親しくなった一つのチャンス。
もう一つはちょっと顔が赤くなるような話だ。赤くなるといっても、劣等感や罪悪感によるものではない……。それは、やはり夏の日の夕方だった。烈しい練習で、頭から足の裏まで、ビッショリ汗まみれになった英子達、五人の女子選手は、控室の裏手の専用シャワー室で、身体の汗を洗い流していた。
男子用のは故障で使えなかったので、男達は谷を上っていって、よその部のシャワー室に行った。例によって、プレーしている時以外は動作がゆっくりしている坂本一雄が、みんなにおくれて一人きりで、首にさげたタオルで顔を拭きながら、ラケットをかついで、曲りくねった小みちの段々を登りかけた。
すると、シャワー室のくもりガラスの欠けた所から、一雄の姿を見かけた柴山和子が、
「坂本くーん。私たち五人でシャワーを浴びてるんだけど、一つあまっているから、よろしかったら貴方もここで浴びていったら……」
「いやだな。ぼくはそれほど心臓が強くないんでね」
「あら、女五人の裸体の展示会をみるなんて、男として最高のチャンスよ。……ね、こんなカラッとした気持のいい時、幼児のように肉体の性別を忘れて無邪気にふるまう日が、私達の人生に一度ぐらいあってもいいと思うんだけど……」
柴山和子は開放的な性格で、ズバズバ物を云うが、雰囲

気を下品にしない頭のよさがある。中肉中背、鼻が少し低く唇が厚く、整っているとは云えないが、性格からくる魅力が、顔にも身体つきにも溢れている。
「いらっしゃいよ、坂本さん！　……私達の無邪気な誘いに応じないというのは、貴方が無邪気でないのを証拠だてるようなものだわ。……カモン！　ボーイ！」
今度は、あまり背が高いので「キリン」というあだ名がある永瀬やす子が声をかけた。
「いろいろ絡むんだな。じゃあ入るよ。ぼくのオヤジは産・婦人科の病院を経営しているので、耳を通して、女の身体にはわりあい慣れているんだ……。男として、声をかけられて、テキに後を見せられないからな……」
「どうして私達がテキなのよ」
それには答えず、一雄はシャワー室に入って来た。脱衣場で、靴やパンツやシャツを脱ぐ気配がして、間もなく、肩に手拭いをかけたきりで、一雄はそれこそ幼児のような丸裸で浴室に入って来た。シャツやパンツのあとが肌に白く残っている。女達は一瞬シンとなったが、人数の勢いで落ちつきをとりもどした。
「坂本さんは向い側のシャワーを浴びるのよ」と、柴山和子が指定した。
一雄は云われた通り、女達に向い合った場所でシャワーを浴びた。女達は、一雄が、手拭いを肩にのせたぎりで、あまりにも露出過度なので、はじめは目のやり場に困ってるようだったが、そのうちに、一雄の無邪気さに、自分達も誘いこまれて、あまりこだわりを感じなくなった。
「おーい、誰かシャボンをほうってくれ、頭を洗うんだから……」
「ハイ、ほうるわよ……」
桑田英子がほうった泡のついたシャボンを、一雄は両手で上手に受けとめて、それから目をつぶって髪を洗い出した。
一雄の目が見えなくなっていることが分ると、英子の目は、そうしまいと思っても、しぜんに一雄の身体の男である部分に牽きつけられた。そして、そうすることが、少しも卑しいことに感じられないのであった。それどころか（男のしるしって、なんだか可愛らしいみたいなもんだわ）と思って、うっかり吹き出しそうになったりした……。
身体を洗い終り、女子学生達は半袖のスウェーターに短いスカート、一雄は黒のウールの長袖のスウェーターにジーパンを穿いて、シャワー室から出た。
「坂本くん。若い女性の肉体を五個も観賞出来て楽しかっ

だっしょう」
「バカを云うな。ぼくは恐かったよ。女五人に男一人だろう。どんな暴行を加えられるのかと思ったりして……」
「バカねえ。暴行を加えられないので、ガッカリしたんじゃないの」
「そ、それあね、人生にめったにないチャンスに恵まれて、ぼくは少しトクをしたかなと思ったりしたかも知れないけど……。しかし、その点ではおあいこだな」
「おあいこじゃないわね。私、貴方のほうなんか一ぺんも見やしなかったもの」
「私も——」
「私も——」
「英子ちゃんは——?」と、開放派の柴山和子が尋ねた。
「私も見まいと思ったんだけど、どうしても視線がこの人の男性の部分に牽かれるの。だから、私、この人が頭を洗ってる間、ていねいに眺めてやったわ」
「正直でよろしい！　それで、感想は——?」
「男性のしるしって、あんがい無邪気で可愛らしい造型のもんだなと思ったわ。写真で、ギリシャ彫刻の男の裸像をよくみるでしょう。実物もあれと変らないわ。可愛らしい形なの……」

みんなドッと吹き出した。一人の女子選手は感激のあまり、いまシャワーを浴びたばかりの両手をコートの地につけて、グルグル逆か立ちしてまわったほどだ。
「私も同感だったな」
「私も……」
「私も……」
「なあんだ、みんな見てたんじゃあないの。坂本さん、ごめんなさい。これは私達が卑しいというんでなく、人間を男と女に分けてつくった神様の思し召しに適ったことなんだから……」
柴山和子に慰められた一雄は、よけいにムッとした表情で、
「何とでも云えよ。こんど、君等の誰かが、人のいない所にいるのを見つけたら、ぼくは彼女を押えつけて、ひどい目にあわしてやるからな……」
「どうぞ、どうぞ……」
「賛成！」
「私も——。でも、坂本君は女を押えつけても、それからどうすればいいのか、女の身体の扱い方など知らないんじゃない。そうに決ってるわ」
変な勢いにのった女性達には勝てず、一雄は何かブツブ

ッ呟きながら、大股で、急傾斜の曲りくねった小みちを登っていった。

女達はベンチに腰を下した。空には陽の光があって明るいが、緑の樹々に囲まれた谷間のコートには、もうたそがれの色が漂っていた。森の中で野鳥が啼いている。

「私たち、大変なことを仕出かしてしまったわね」

「気にしない。しぜんの成行なんだから……」

「責任はむしろ彼の方にあるわ」

「声をかけたのは私達だけど、だからって女ばかりの所へノコノコ入ってくるなんて、坂本君ものんきすぎるのよ」

「英坊が、男性の肉体のシムボルは、無邪気で可愛らしいと云ったけど、あれは名言ね。ほんとに可愛らしいわ、あの造型は……。それに反して、私等のシムボルは、深い草むらに、ひっそりとつつましく隠れているわ。……『何ごとのおわしますかは知らねども　かたじけなさに涙こぼる』という神々しい感じね。エヘン」

「和子の草むらは特別に深いんだから……」

「こら！」

女達は胸をたたいたり、背中を折り曲げたりして笑い転げた。

「でも、神さまって、男の身体、女の身体、それぞれに人類を存続させるよう上手におつくりになったものね」

「あなたがた、女性の肉体の構造に劣等感を覚えたことがある？」

「ないわ。長い黒髪に恵まれて、胸に白い小山が二つあり、脂ぎったお腹にエクボのようなオヘソが刻まれ、下腹部が滑かで……、特別な生理があって……、私は女に生れたことを、心身ともに満足に思っているわ」

「私もそう……」

五人は、厚い緑に囲まれた、たそがれの谷間のコートで長いこと話しこんでいた。――そして、こういうのが、現代の女子大学生達の間に、稀れにある憎めないY談なのだ。

その出来事で、英子は一生、人に話せない第一の秘密を胸に宿したことになる。年月が経つと、一雄の顔の思い出がうすれて、代りにシャワー室でみた彼の（無邪気で可愛らしい）造型の男性のシムボルが、昨日見たもののように、彼女の脳裏に、手でふれられるような親密な実感で思い出されてきた。そして、その思い出には、数年後、冬山で死んだ一雄の山の日記帖の一頁をコマぎれにして、四日間ばかりで全部食べてしまった思い出のような、重苦しいイヤらしさは、少しも絡みついてはいなかった。しかし、死者の顔の代りに彼の「男性」を思い出すなんて、誰にも

あかされない秘密であることはたしかだった……。
シャワー室事件はすぐほかの部員にも知れ、一雄は川又マネージャーに呼ばれて、ほかの男子部員もいる前で、ウンと脂をしぼられた。
「……君も女子部員もイヤらしい気持がなかったことは分るが、こういう事件は話が大げさになって、庭球部全体の男女間の風紀が乱れているという噂になるからな。今後は気をつけてくれよ……」
「ハイ、分りました。テキから声をかけられて後をみせるのは卑怯だと思ったりして、つい……」
「分るよ。戒告はこれで終る！　……これからあとは世間話になる……」と、川又マネージャーはニヤニヤ笑って、少し声をひそめ、
「ところで、坂本。五人のテキの中で誰のオッパイが一番大きかったかね？」
「ヒップは――？」
「オヘソはみんなあったかい？」
「蛙じゃあるまいし、可哀そうなことを云うなよ。それよりも、誰がもっとも濃い密林の所有者だったかね？」
以下、不良な質問がつぎつぎと男子選手達から連発されという。あとで、その話を、校庭のベンチで一雄から聞かされた英子は、質問ごとに、目をパチクリさせていたが、心の中では彼等をうとんずる気になれず、若い男性が五六人も集っていれば、ときに、その程度の世間話が出るのも仕方がないことだろうと思った。げんに女である自分達も、男性の（無邪気で可愛らしい）造型物について話し合ったくらいだから……。
「それで、一雄君は質問の一つ一つに何と答えたの
「いや、こっちが男一人だし、向き合っている五人の肉体の細部を鑑賞する心理的な余裕などなかった――。そう云ってやったよ。じっさいそうだったんだから……。でも、あれもこれも、見なかった、知らないでは、ウソをついてるみたいなので、一つだけ見たことにしてハッキリ答えたよ。ぼくの苦しい立場を察してくれよ、な……」
「何が苦しい立場よ。で、どの質問にどう答えたの？」
「そう聞かれると弱いなあ。でも、目をつぶって云うよ。誰がいちばん濃い密林の所有者だったかという質問に対して、ぼくは、それは英坊のようだったなと答えたんだよ。英坊の名前がいちばん口にのせやすかったから……」
「こら！　人をバカにして……」と英子は一瞬、顔を赤らめ、それから握り拳で一雄の頭を二つばかりポカポカ殴った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook